

長野県小布施町



栗菓子屋

(行政) 小布施町 建設水道課 都市計画係



小布施町は長野県東北部、長野盆地（通称：善光寺平）の東縁に位置し、人口11,326人、四方を山と川に囲まれ、北信五岳を一望できる自然豊かで風光明媚な環境にある。

この地域一帯の歴史は古く、縄文中期末頃から集落が形成され稲作が行われていた。江戸時代には、水運を利用した流通が盛んになるとともに、物産、交易で賑わう中で、小布施町は北信濃の経済・文化の中心として栄えてきた。この賑わいの中から豪農・豪商たちは葛飾北斎、小林一茶らの多数の文人墨客を招き、今に続く文化の薫り高い雰囲気や形づくられている。

現在は栗などの果樹栽培が盛んな農村として、美しい自然環境に恵まれ、人間味豊かな地域社会が形成されている。

これらの特徴ある風土を活かし、先覚が残した文化遺産を継承、発展させて、「北斎と栗の町」「歴史文化の町」「花の町」として年間120万人の人が訪れる町となっている。

まちづくりの変遷（5つのポイント）

①人口減への対策

昭和30年代に始まった高度経済成長期に、地方から大都市への若年層の人口の移動が全国的に激しくなり、小布施町でも人口減少は大きな問題になった。

人口減少に歯止めをかけるため、公営住宅の建設、宅地の造成・分譲などを積極的に推進してきた。

②北斎館の建設

昭和51年、葛飾北斎の画業を讃えるとともに、肉筆画を保存・展示するため「北斎館」が建設され、当時は“田んぼの中の美術館”と言われながらも、小布施町は北斎のまちとして全国的に脚光を浴びた。

③地場産業・栗菓子店の活躍

北斎館などに訪れる観光客が増えるようになり、銘菓の「栗菓子」店は、売るだけではなく、訪れた人が滞留してもらえるよう、再び訪れたくなるような工夫として、喫茶店や美術館を活用しながら、小売・飲食サービスを始めた。

④町並修景事業

昭和51年、「北斎館」・「修然楼（郷土の豪商・高井鴻山の隠宅）」周辺などの歴史的建造物の保存と地域の特性を生かしたまちづくりのため「修然楼周辺町並修景事業」において、町・事業者2・個人3の6者がそれぞれの役割を明確にした上で取り組み、この事業の中で栗の木煉瓦を敷き詰めた散歩道「栗の小路」も誕生した。

この修景事業は小布施の「顔」づくりに大きな役割を果たし、結果として歴史的建造物はそのまま活かされ、限界性のある空間を巧みに演出することに成功し、多くの観光客を惹きつけるのみならず、地元住民のまちづくりへの参加意識を大いに高めるものとなった。



⑤花のまちづくり

昭和50年、中学校緑化部から始まった花づくり運動は、育成会や老人会、自治会を通じて全町に広がり、町民グループによる花づくりが盛んに行われるようになった。

平成4年には回遊式の花壇や観賞温室を備えた花の公園「フローラルガーデンおぶせ」が開園、平成9年には花の育苗施設「おぶせフラワーセンター」を整備し、農家への花苗の提供による市場への出荷、販路開拓による花の産地化も進めている。

平成12年からは、住民と行政の協働による全国で初めての取り組みで、個人の庭園を一般に公開し、来訪者との交流を楽しむ「オープンガーデン」がスタートとした。当時は38軒でのスタートだったが、現在では130軒にまで発展している。

このオープンガーデンは住民主体の事業であり、所有者の好意に基づいたボランティアで成り立っている。町は「オープンガーデンブック」と「案内看板」を用意するだけの下支えに留まり、苗の支給や補助などはない。

これも、昔から町民に根付いている文化で「おにわごめん」と他人の庭を通っていたことや、庭を見に来た人々が喜んでる姿を見ることが嬉しかったりすることなどが、所有者の意欲へと繋がっている。

まちなみ風景



オープンガーデンの様子



住民について

1. 地域住民のまちづくりへの意識

外はみんなのもの、
内は自分たちのもの

昭和51年、「北斎館」周辺などの歴史的建造物の保存や新建築物の周辺との調和，“土地は売買せず賃貸か交換すること”など、町・事業者2・個人3の6者が対等な立場で面的な整備を行った方法は、画一的な都市開発の手法とは異なり、「小布施方式」と言われ全国的に高い評価を受けた。

これを契機として、周囲の景観との調和と美しい町づくりの指針となる「環境デザイン協力基準」「住まいづくりマニュアル」などを作成する過程で、住民の意識の中に「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という意識が芽生え、住宅の配置、外観への配慮、さらには通りを行き交う人々に安らぎを与える花壇や生け垣づくりなどに発展し、住民のまちづくりへの主体性が培われてきている。

2. まちづくりの先駆者

元小布施堂副社長 市村良三氏（現町長）

市村氏は、全国に先駆けて、1994年に民間のまちづくり株式会社「ア・ラ・小布施」を立ち上げ、住民の町おこし運動の中心的人物として、小布施方式と言われた景観整備事業、小布施映画祭、国際音楽祭などの様々な事業を成功させ、全国的に小布施の名を広めた。

ア・ラ・小布施は、第3セクターながら町の出資比率4%で、あくまで民間主導のまちづくりを目指す会社であるにも関わらず、出資者への配当は行わず、町の発展が出資の見返りというユニークなコンセプトでまちづくりを進めてきている。

現在では、地元農林加工品の製造販売や、町からの委託により「おぶせガイドセンター」を運営し、観光情報の提供を行うなど、小布施の情報センターとしての役割を担っている。

また、この他に「交流」をテーマに積極的に事業を展開し、日曜市である栗っこ市（新鮮な野菜・果物を提供）を運営し、観光客のみならず地元住民にも人気で、賑わい・交流できる場を提供し続けている。

ア・ラ・小布施は様々な人が企画を立ち上げ、内外から人を惹きつけ、成功を収めてきた。そこにあるのは、地元住民が一緒に参加して、まず「自分たちが交流を楽しむことがいいまちづくりに繋がる」という一貫した姿勢があったからこそ、「行政に頼らず、住民が主体となり、積極的にまちづくりに関与する」ことが当たり前として、現在の“おぶせ”独自のまちづくりが進んでいる。



3. まちづくりの活動団体

多種多様な活動団体

今までの住民主体によるまちづくりの取り組みによって、現在では約240団体が様々な活動を行っている。

平成20年から住民が誰でも参加できる小布施まちづくり委員会を立ち上げ、様々な立場の人が自由に意見を交わし、住みよいまちづくりを考え実践する場を提供している。

ここでは、「安全」「環境」「福祉」「交流」「教育」の5つのテーマごとに部会を設け、月1回くらいのペースで熱い議論が繰り広げられ、様々な取り組みが行われている。

1. まちづくり団体と行政の関わり

行政の関わり方

小布施町では、住民のまちづくりに対する意識や、まちづくりには積極的に参加するものという意識が、今までの取り組みの中から芽生えている。

このため、行政が各種まちづくりの施策を打ち出して行政主体で進めるのではなく、住民がやりたいことを行政が後押しすることが重要である。

一方で、行政は住民がやりたいことを待つだけではなく住民がやりたいと言っていることを“やれるきっかけ（仕組みの提案）”を与えることも重要である。

2. まちづくりワークショップ（住民との話し合い）の進め方

ワークショップの進め方

ワークショップにおいて、住民に自由に話し合ってもらい、答えを導き出すのは時間がかかり大変である。

先ず事前に“工期、予算の上限”を行政がしっかり提示した上で話し合ってもらうことが重要である。

あくまでも、住民同士が話し合い、住民がやりたいと思うことを、行政として何ができるのかを考え、サポートする姿勢が大切である。

住民の自立性

行政がまちづくりの施策を打ち出し、それに対して住民が意見を言う場という形でワークショップを行っていないので、行政と住民との意見調整を行うファシリテーターなどを活用する必要はない。

住民同士の話し合いは、住民の中から会議の進行役とまとめ役（リーダー）を決めて話し合ってもらうスタンスで進めている。このことで、**住民の自主性**が確立される。

合意形成を図る上での 反対者への対応

住民がやりたいと思っているまちづくりの取り組みを、やりたい住民が集まり、どのようにして取り組んでいくかなどを前向きに話し合っており、反対者さえも巻き込みながら進んでいく。

3. まちづくりで活用した補助事業

補助事業を活用 するための考え方

行政主導による補助金ありきでのハード事業などの地域振興策をやってもダメ。

まちづくりの取り組みにつながるような人材育成に関する補助事業などを活用することが大事である。

ふるさと創生事業 ふるさと交付金

まちづくりの取り組みの一つである「オープンガーデン」を町域全体に広げようという試みで、補助金を活用して、花のボランティア団体や、住民（中学生から大人まで）などの視察団を本場ヨーロッパへ派遣し、先進地を視察した。

これにより、個人住宅だけであった取り組みが、路地裏にまで広がることで、道路と行き止まりのない周遊が可能となり、大きな活動に繋がった。

まちづくりの秘訣と今後の取り組み

1. まちづくりの成功の秘訣

賑わい創出 ⇒ 観光

持続的な魅力あるまちづくりを行うためには、地域住民と来訪者との多彩な交流を通じて、地域住民が、自分たちにとってどうすれば住みよい街になるのか、地域活性化につながるのか、産業振興につながるのかなどを、地域住民が自ら考えることが重要である。

また、行政は、あくまでも地域住民がやりたいことを裏方としてサポートに徹することが重要であり、住民と行政との交流の場を設け、話しやすい環境づくり、やろうと決めたことを実行に移しやすい環境づくりを行うことが重要である。

これらを前提としたまちづくりを行うことで、地域住民にとって住みやすいまちづくりに繋がりが、結果的に“賑わいの創出”が生まれ、外部からも魅力あるまちとして観光に繋がることが成功の秘訣である。

2. 小布施町の今後の取り組み

未来を担う次世代の育成

今まで最前線で活躍してきた人材が高齢化を迎えるため、未来を担う次世代の育成が不可欠である。具体的には、若者からまちづくりへの想いを汲み取れる環境をつくり、やりたいことを実現させる取り組みを進めている。

取り組みの事例として、若者と地域をつなぐきっかけの場である「小布施若者会議」が設置されている。18歳から35歳までの若者100名が集い、地方や地域の未来について2泊3日の中で語り合い、会議で得た気づきやアイデアを持ち帰って実践し変革に繋げるという取り組みである。その会議の中で「若者が遊べる所が少ない」という一言をきっかけに、まちにボルダリング施設が生まれた。今では若者だけでなく幅広い世代が楽しめる場所となった。

また、世代を超えて繋がり、地域の未来を議論する場として「地域の未来づくり会議」が設置されており、これは自治会ごとに未来に残したい地域の誇りや解決していきたい課題を議論する場である。

成果として、空き家や使われてない農地などの問題を行政と民間が協力し、空き家の事業利用の補助や、農業支援事業、定住促進事業などが整備されることとなった。